

経済循環とフランソワ・ケネー

川 瀬 進

目 次

- I. はじめに
- II. フランスの経済状態
 タイユ・ロアイヤル
- III. 経済循環
- IV. おわりに

I. はじめに

ある一定単位期間内の産業部門の財、およびサービスの経済循環を適切に把握するには、産業連関表（The Interindustry Transactions Table）がなくてはならない。

この産業連関表は、当然、ある産業部門の投入構造と販路構造とを、集約的にかつ簡潔に表にあらわしたものである。

また、この産業連関表は、レオンティエフ（Wassily W. Leontief, 1906-）がめざした一般均衡理論への経験的適用を、統計的に表にあらわしたものである。

社会の経済循環、すなわち経済構造を分析する上でなくてはならない産業連関表は、レオンティエフの努力の結果、出現したものである。またこの産業連関表の系譜をたどれば、フランスのエコノミスト、すなわちフランソワ・ケネー（François Quesnay, 1694-1777）の『経済表（Tableau économique, 1758）』になる。

経済循環をあらわすこのケネーの『経済表』は、ある日突然、出現したの

ではなくて、当時のフランスの経済状態の結果、出現したのである。

そこで本稿では、当時のフランスの経済状態の中で、特に農民に課せられたタイユ・ロアイヤル (Taille royale) を考察するとともに、そのタイユ・ロアイヤルがケネーの経済循環思想に、どのように影響を与えたか、またそのケネーの経済循環思想が、どのような形であらわれていったか、をも考察する。

II. フランスの経済状態

ケネーは、1694年6月4日、パリの西の郊外、すなわちヴェルサイユの西約15マイルのメレ (Mére) の村で生まれた¹⁾。

ケネーが生まれた当時のフランスは、アンシャン・レジーム (Ancien Régime)²⁾の時期であり、気候が温暖で、天然資源が豊富で、さらに土地が灌漑されていて、農業に適した農業国家であった³⁾。

ケネーの父ニコラ (Nicolas) は、地主であった⁴⁾。地主といっても裕福な地主ではなくて、生活のため、何か他の職業に多少依存しなければならないとする地主であった。要するにニコラは、自分が所有する土地だけでは、家族を養うことができない小作農であり、また雑貨商人でもあった⁵⁾。

注1) Niehans, J., *A History of Economic Theory*, Classic Contribution, 1720-1980, Repr. of 1990, The John Hopkins University Press, 1994, p. 37.

2) アンシャン・レジームとは、1789年フランス革命が勃発した前の体制、すなわち「旧体制」を意味する言葉である。もう少し厳密にいうと、このアンシャン・レジームとは、16世紀初期から18世紀後期のフランス革命までの約300年間の間の「古い行政」を指す言葉である。このアンシャン・レジームを便宜上、16世紀を形成期、17世紀を最盛期、18世紀を解体期とするならば、ケネーの父ニコラ (Nicolas) は、最盛期、ケネーは解体期に、位置していたといえるであろう。

3) Ogg, D., *Louis XIV*, Second Edition, Repr. of 1931, ed., Oxford University Press, 1967, p. 26.

4) Oser, J. and Blanchfield, W. C., eds., *The Evolution of Economic Thought*, Third Edition, Repr. of 1963, ed., Harcourt Brace Jovanovic, Inc., 1975, p. 34.

5) Niehans, J., *A History of Economic Theory*, op. cit., p. 37.

もしケネーの父ニコラが裕福な地主であったならば、生活のため雑貨店を営まなくても良かったであろう。またケネーが、13人兄弟のうち8番目の子供であったとしても⁶⁾、11歳の時まで、読み書きができなかった、ということもありえなかったであろう。

アンシャン・レジーム時期のフランス国庫の収入源は、王室領の収入と国税とであった。王室領の拡大なしには、王室の収入増は考えられない。だが、アンシャン・レジーム時期のフランスは、貴族の力が強く、ほぼ王室領の拡大など考えられなかった。そこで、国庫の収入増を図るためには、国税をアップするしかなかった。だが、この国税には、貴族と特別階級の僧侶とが免れていた。実際、この国税を支払っていたのは、農民だけであった。

そこで、フランス革命⁷⁾の前の体制、すなわちアンシャン・レジーム時期の経済状態を考察するには、当然、農民の生活状態を知らなければならない。

アンシャン・レジーム時期、農民に重く押し掛かってきた国税は、タイユ・ロアイヤルである⁸⁾。

このタイユ・ロアイヤルを正確に知ることにより、アンシャン・レジーム

6) *Ibid.*, p. 37.

7) フランス革命の勃発は、1789年7月14日、アンシャン・レジームに反発した国事犯を収容していたバスティーユ (Bastille) 監獄を、市民が襲撃したことによる。このバスティーユ監獄の襲撃・攻略により、フランス市民は、1789年8月4日農民たちを土地から解放した「封建制の廃止」、8月26日特権階級の有する権利を剥奪するとともに、農民や手工業者などの直接生産者が本当の自由な市民になった「人間と市民の権利宣言」、1791年3月直接生産者たちに生産と流通との自由を保障した「取引税、親方身分、宣誓組合、特許制の廃止に関する布告」、9月30日専制君主政治をやめさせた「国民議会解散」、10月1日新しい憲法を生む「立憲議会成立」、1792年9月21日王政の廃止を行った「国民公会成立 (National Convention) および共和政成立」、1793年1月21日ルイ16世 (Louis XVI, 1774-1792) の処刑、を勝ち得た。

8) このタイユ・ロアイヤルは、1436年シャルル7世 (Charles VII, le Victorieux, 1422-1461) が農民に永続的に課した租税、すなわち不動産税であった。

• Petter, D., *War and Government in the French Provinces, Picardy 1470-1560*, Cambridge University Press, 1993, p. 21.

• Moreton Macdonald, J. R., *A History of France*, Vol. 1, Repr. of 1915, ed., New York: AMS Press, 1971, p. 315.

当時の経済状態が把握できる。

タイユ・ロアイヤルは、以下3つの原因により、国王みずからが農民に対して徴収しなければならなかった課税である。

1. 進歩のない農業技術
2. 好戦的な王の政策
3. 宮廷内の浪費

第1の進歩のない農業技術とは、アンシャン・レジーム時期の農業技術が、中世から続いていた農業技術とあまり変わっていなかった、ということによる。アンシャン・レジーム時期の農法は、北部ではすでに三圃式農法が取り入れられていたが、それ以外の地方では、依然と中世以来の二圃式農法を行っていた。また農具においても、深く耕せない犁刀も付いていない中世以来のアラール (Araire) を使用していた。

アンシャン・レジーム時期のフランスは、気候が農業に適していたといえども、このような農法および農具では、1 ha当たりの収益を上げることができず、農業技術は、衰退したままであった、といえる。

第2の好戦的な王の政策とは、ルイ14世 (Louis XIV, le Grand, 1643-1715) が行った恣意的な戦争のことである。この恣意的な戦争とは、以下4つの戦争のことである。

- ネーデルランド戦争 (The French Aggression the Spanish Netherlands, 1667-1668, 1668年のアーヘン (Aachen) 条約で終結)⁹⁾。
- オランダ戦争 (The Duch War, 1672-1678, 1678年のナイメーヘン (Nijmegen, Nimwegen, Nymwegen) の条約で終結)¹⁰⁾。
- アウグスブルク同盟戦争 (La Guerre de la Ligue d'Augsbourg, 1689-1697,

9) Clark, G., The Later Stuarts 1660-1714, in Sir George Clark, eds., *The Oxford History of England*, Vol. 10, Second Edition, Repr. of 1956, ed., Oxford University Press, 1991, p. 69.

10) Lodge, R., The History of England, from the Restoration to the Deth of William III. 1660-1702, in William Hunt and Reginald L. Poole, eds., *The Political History of England*, Vol. 8, Repr. of 1910, ed., AMS Press, Kraus Reprint Co., New York, 1969, p. 111.

1697年のライスウィク（Ryswick）条約で終結¹¹⁾。

• スペイン継承戦争（The War of the Spanish Succession, 1701-1713, 1713年のユトレヒト（Utrecht）条約およびアシエント（Asiento）条約で終結¹²⁾。

第3の宮廷内の浪費とは、宮廷内の役人たちが競って、奢侈品を買いあさったり、また1668年から1682年にかけてのヴェルサイユ宮殿の造営工事である¹³⁾。

このヴェルサイユ宮殿が、いかに巨額な課税でもって建造されていたかを、表1 ヴェルサイユ宮殿の年代記（1624-1774）から判明できる。

ルイ14世は、連日連夜、貴族をヴェルサイユ宮殿に呼び、祝宴をあげた。この祝宴のため、ヴェルサイユ宮殿内の役人たちは、それに見合っただけの高価な装飾を身に付けた。

巨大なヴェルサイユ宮殿、また広大なヴェルサイユ宮殿の庭園、これらはすべて、農民の血税から建造されたものであり、農民が起こしたフランス革命の1因が良くわかる。

以上3つの原因のうち、ルイ14世が1番税金を必要としたのは、第2番目の好戦的な王の政策であった。というのは、ルイ14世が行った4つの戦争、

11) このアウグスブルク同盟戦争は、1688年ルイ14世が自分の弟オルレアン公フィリップ（Philippe, Duc d'Orléans, 1640-1701）の妻が、ドイツのプファルツ（Pfalz）選帝侯ルートヴィヒ・カール（Ludwig Karl I, 1648-1680）の妹であったことから、プファルツの相続権を主張し、プファルツを占領したことに起因する。いいかえると、このアウグスブルク同盟戦争は、ルイ14世のプファルツ侵略に対して、1689年イングランドのウイリアム3世（William III, 1689-1702）がオランダを中心に、スペイン、スウェーデン、バーバリおよび南ドイツの多数の無防備小国家を集結させ、そして戦った戦争であった。

• Moreton Macdonald, J. R., *A History of France*, Vol. 2, *op. cit.*, pp. 261-263.

• Lodge, R., *The Political History of England*, Vol. 8, *op. cit.*, p. 312.

12) Leadman, I. S., *The History of England, from the Accession of Anne to the Death of George II. 1702-1760*, in William Hurt and Reginald L. Poole, eds., *The Political History of England*, Vol. 9. Repr. of 1909, ed., New York: AMS Press, Kraus Reprint Co., 1969, p. 187 and p. 206.

13) Meyer, D., *Versailles*, Dépôt légal Janvier, 1994, p. 4.

表1 ヴェルサイユ宮殿の年代記(1624-1774)

1624年	ルイ13世がヴェルサイユの丘に狩の館(hunting lodge)を建造。
1631年	ルイ13世がフィルベール・ル・ロフ(Philibert Le Roy)に狩の館に代わる城館(a small château)の建造を依頼。
1661年	宰相マザランの死。ルイ14世の親政の開始。コルベールが財務長官に任命。
1663年	建築家ル・ヴォー(Le Vau)が最初のオランジュリー(orangery)を建造。また動物舎の建造をも開始。
1664年	王によって披露された祭典『魅せられた島の悦楽』が、5月に開催。
1665年	最初の彫像群が庭園に設置。テティスの洞窟(Grott of Tethys)が創作。
1667年	大運河(Grand Canal)の掘削開始。
1668年	石造りの建物(ルイ13世が建造した城館:挿入一川瀬)を囲む形(enveloppe depierre)で、ル・ヴォーの庭園に直面する宮殿部分の拡張計画案を認可。 <ul style="list-style-type: none"> ・7月18日、宮廷を困惑させたルイ14世の『宮廷大嬉遊会』の申し出。
1670年	磁器のトリアノンが建設。
1672年	湯殿および大使の階段の建造開始。
1674年	<ul style="list-style-type: none"> ・庭園用の24彫像が制作依頼。 ・ヴェルサイユ宮殿で開催された3つの大祭典のうち、最後の祭典がルイ14世によって上演。 ・庭園に面したテラスが「鏡の回廊」に再度設置。
1678年	ル・ブラン(Le Brun)が正殿の装飾を完成。
1682年	5月6日、王がヴェルサイユを宮廷の公的所在地、また政府の所在地にも決定。
1684年	「鏡の回廊」の完成、およびオランジュリーの建造。
1685年	北翼棟の建造開始。
1687年	「大理石のトリアノン」の建造。
1689年	12月、ルイ14世が銀メッキを施した食卓用の銀器および家具を注文。
1710年	王室礼拝堂の完成。 2月15日、ブルゴーニュ公の第3番目の息子アンジュー公、そして将来のルイ15世が誕生。
1715年	9月1日、ルイ14世の死去。 9月9日、ルイ15世が居住をヴェルサイユからヴァンセンヌ(Vincennes)に移転。
1722年	6月15日、ルイ15世が再度、居住をヴェルサイユに移転。
1725年	9月15日、ルイ15世がフォンテーヌブローで、ポーランド王スタニスワフの娘マリー・レシチンスカと結婚。
1738年	内殿の大改修工事。
1747年	王太子(Dauphin)*とサクスのマリージェゼフとの結婚。 ※(Dauphin=Louis, 1729-1765:ルイ15世の長男-挿入:川瀬)
1754年	8月23日、ベリー公、その後のルイ16世誕生。
1768年	建築家ガブリエル(Gabriel)が「小トリアノン」を完成。
1770年	5月16日、王太子(ベリー公、後のルイ16世-挿入:川瀬)とオーストリアおよびロレーヌの皇女マリー・アントワネットとの結婚。ガブリエルによる「国立オペラ劇場」の落成。
1771年	街側に直面する宮殿正面の再建計画。ガブリエルがルイ15世翼棟建設を開始。
1774年	5月10日、ルイ15世がヴェルサイユで天然痘にて死去。

Source: Meyer, D., *Versaille*, Dépôt légal Javier, 1994, p. 4.

(メイヤー氏のヴェルサイユ宮殿の年代記には、1624年から1986年までが記載されているが、著者=川瀬は、ケネーが活躍した18世紀の中頃までのヴェルサイユ宮殿が知りたかったから、あえて1624年から1774年までとした。)

いずれも敗戦に終わっていたからである。いいかえると、ルイ14世は、戦費を捻出させるために、タイユ・ロアイヤルを農民に強化しなければならなかったのである。

反対に農民側にとっては、779年シャルルマーニュ（Charlemagne, カール1世, Karl I, 742-814）によって、再編成されたディーム（Dîme, 10分の1税）¹⁴⁾をはじめとして、領主的諸権利（Droits seigneuriaux）の下、およびタイユ・ロアイヤルのもとで、生活しなければならなかった。

アンシャン・レジーム時期のこのタイユ・ロアイヤルは、絶対王制によって徴収された課税であり、また封建制時代の人頭税である領主タイユ¹⁵⁾を強化・発展させたものであり、さらに地租としての性格を持つ不動産税でもあった。

このタイユ・ロアイヤルを解明する前に、このタイユ・ロアイヤルのもとになった領主タイユを考察する。この領主タイユとは、いかなるものであるかを考察するには、封建時代の農民 vs. 領主の抗争を知らなければならない。

農民 vs. 領主の抗争、すなわちその主たるものは、13世紀初頭から中葉にかけての第1次農奴解放運動と、14世紀初頭から中葉にかけての第2次農奴

14) ディーム（Dîme）、すなわち10分の1税は、フランク王国カロリング朝の開祖シャルルマーニュの父ピピン3世（Pippin III, der Kleine, 714-768）が、フランク王国内で納税の義務を承認し、そしてシャルルマーニュが779年に支配地全土に課した租税である。このディームは、もともと教会の運営費、祭式の費用、ボランティアの活動費のため、領主や農民のすべての土地所有者が、その収穫物の1部あるいは生産物の1部を、教会に払い込まなければならなかった課税であった。だが、このディームは、やがて多種多様のプロセスを経て、9世紀以降、領主によって徴収され、封建的課税徴収源の1要素となった。また、このディームは、フランス革命によって廃止されるまで続いた。

15) 封建制時代のタイユは、領主が被裁判領民に対して課した給付型の課税、すなわち領主タイユであった。これに対して、アンシャン・レジーム時期のタイユは、国王が全農民に対して課した課税、すなわちタイユ・ロアイヤルであった。この結果、アンシャン・レジーム時期のタイユ・ロアイヤルは、封建制時代の領主タイユを発展・強化させた課税である、ということが出来る。逆に封建制的領主タイユは、アンシャン・レジーム時期のタイユ・ロアイヤルのプロト的な課税であった、ともいうことが出来る。なお封建制的タイユには、領主タイユのほか、軍隊免役タイユ、守護タイユがあった。

解放運動とがあった。

13世紀初頭から16世紀初頭までの約300年間もの続いた農奴 vs. 領主の抗争、さらに農民層が王権より支持を得たことにより、16世紀初頭には、領主が農民から土地を奪うことができなくなった。その要因は、当然、領主が保持している土地所有権に対する農民の激しい抵抗と、領主が保持しているさまざまな特権に対する王政の危惧とがあったからにほかならない。

この結果、王権は、領主階級から高級裁判権 (Haute justice) と、土地裁判権 (Justice foncière) とを取り戻した。また、王権による法原理の発展と、地域慣行法の改訂とによって、永代保有農民が真の土地保有者とみなされることになった。

農民保有地 (Tenure) を失った領主は、租税を確実に確保するために、領主直営地の再建に乗り出さなければならなかった。すなわち領主が行った再建策とは、第1に保有農民 (Tenancier) が子供を残さずに死んだ場合、その土地を領主の留保地 (Réserve) にすること、第2に自由農民 (Vilains) が戦争やそれ以外の理由で、土地を放棄した場合、その土地を領主の所有地にするのであった。

領主直営地の再建に成功した領主は、より一層の課税を確保するために、中世の時代にみられたような土地台帳 (Cadastré) の慣行を実施した¹⁶⁾。

この土地台帳の慣行により領主は、土地台帳に残っていた古い諸権利を手に入れることができた。その結果、領主は、自己の諸権利を拡大することに成功した。いいかえると、この土地台帳の慣行により農民は、ディーム (10分の1税)、領主タイユをはじめ、もろもろの領主的諸権利 (Droits Seigneuriaux) の下で、生活しなければならなくなった。

だが、ディームおよび領主タイユは、貨幣価値の下落のため、あまり重くなかった。

そこで領主は、ディームおよび領主タイユからの収入減を補うために、領

16) Jones, P. M., *The Peasantry in the French Revolution*, Cambridge University Press, 1988, pp. 38-39.

主的諸権利の強化，具体的には，一定額の租税収入増をはかるために，課税の税率をアップしなければならなかったのである。

税率がアップされた主な課税品目は，以下のとおりであった。

- 現物地代
- 所有権移譲税
- 相続税
- 下級裁判の罰金率

農民 vs. 領主の抗争は，常に領主が勝ち，領主は，農民にディームおよび領主タイユを課することができ，その結果，きらびやかな生活を送ることができた。

中世時代，領主の生活基盤を築き，そして領主がきらびやかな生活を享受できたのは，当然，この領主タイユである。この領主タイユは，人頭税であり，確実に領主の手に入る課税であった。反対に，農民にとってこの領主タイユは，生活を脅かす課税であり，また土地に緊縛させられた租税でもあった。

• タイユ・ロアイヤル

アンシャン・レジーム時期，このタイユ・ロアイヤルが農民に対してひどいに重くなり，また農民の生活をも害するようになっていった原因は，2つある。すなわち第1にコルベルティスム（Colbertisms）の失敗，第2に行政の腐敗である。

第1のコルベルティスムの失敗とは，財務総監（Contrôle général des finances）コルベール（Jean Baptiste Colbert, 1619-1683）が¹⁷⁾，フランスの財政再建のために行った重商主義政策の失敗のことである¹⁸⁾。

17) Ladurie, E. L. R., *The Royal French State 1460-1610*, Repr. of 1987, ed., Blackwell, 1994, p. 3.

18) cf. Beik, W., *Absolutism and Society in Seventeen-Century France*, State Power and Provincial Aristocracy in Languedoc, Repr. of 1985, ed., Cambridge University Press, 1987, p. 288.

1665年に財務総監に就任したエコノミストのコルベールは、フランスの財政を立て直すために、王権による保護政策、つまり重商主義政策しかない、と考えた。この重商主義政策は、具体的には、外国からより多くの金銀を奪取するという政策であり、コルベルティスムと呼ばれる経済政策であった。

だが、このコルベルティスムと呼ばれる経済政策は、王権の過度なる保護政策であったため、産業の自由な発展を妨げ、農業の衰退を招き、経済に悪影響をおよぼした。

第2の行政の腐敗とは、スコットランドの銀行家ジョン・ロー（John Law, 1671-1729）¹⁹⁾が設立した紙幣発行権（Banknote）を持つ私立銀行を、行政において良くコントロールできなかったことである²⁰⁾。

ルイ14世が残した34億6,000万フラン²¹⁾もの負債に対処するために、当時のルイ15世（Louis XV, le Bien-Aimé, 1715-1774）の摂政政府は、ジョン・ローのシステム、すなわち紙幣（銀行券）発行による金融危機の回避、および植民地市場の拡大による収入増を試みた。

ジョン・ローのシステムの試みが予想以上に順調に行きすぎたため、ルイ15世の摂政政府は、投機熱を抑制し、株価をコントロールしようと思ったが、失敗に終わった。結果的には、このルイ15世の摂政政府の細心な配慮不足から、1720年にフランスに恐慌が起こり、フランス国内に、多くの市民が破産状態に陥ってしまったという、悪い経済現象を引き起こしてしまった²²⁾。

多くの市民が破産状態、すなわちフランスがパニック状態に陥ったという

19) Moreton Macdonald, J. R., *A History of France*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 299.

20) フランス政府は、ジョン・ローの私立銀行に起因する株価への投機熱により、1720年に恐慌を招いてしまった。この結果、株価が暴落し、フランスがパニック状態に陥ってしまった。

• cf. Moreton Macdonald, J. R., *A History of France*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 304.

21) Higgs, H., *The Physiocrats*, Six Lectures on the France Economistes on the 18th Century, Repr. of 1897, ed., Reprints of Economic Classics, Augustus M. Kelly, 1989, p. 5.

22) Haney, L. H., *History of Economic Thought*, Revised Edition, Repr. of 1920, ed., New York: The Macmillan Company, 1923, p. 116.

ことは、当然、課税を対象としている市民および農民から税収入がとぎれるということの意味している。

この1720年のフランス恐慌およびパニック状態は、ケネーが26歳の時であった。

このような経済状態の中、フランス王室は、財政を立て直すために、当然、人頭税であるタイユ・ロアイヤルを、しだいに重くしなけりばならなくなつた²³⁾。いいかえると、フランス国王は、自ら徴収しなければならないタイユ・ロアイヤルを、領主および農民に課せなければならなかつたのである。

このタイユ・ロアイヤルは、タイヨオ (Taillon, 人頭付加税) という形で加増され²⁴⁾、当時の貨幣価値の下落率よりも、ヨリ早く課税率がアップした。

すなわち、このタイヨオ (Taillon) は、タイユ・レエル (Taille réelle, 実質タイユ) と、タイユ・ベルソネル (Taille personnelle, 個人タイユ) とに分かれ、そのいずれかが、パリ以外の地方に適用されるようになったのである²⁵⁾。

なお、タイユ・レエル (Taille réelle) は、土地台帳の評価額に従って、農民に課せられた税金であり、またこのタイユ・レエルから貴族、僧侶階級は、除外された²⁶⁾。タイユ・ベルソネル (Taille personnelle) は、農民の土地財産、および農民の能力の度合いによって課せられたタイユ、すなわち封建制時代の領主タイユの変形であり、またこのタイユ・ベルソネルからも、貴族、僧侶、ブルジョア階級は、除外された²⁷⁾。

タイユ・ロアイヤルは、国王が毎年、国民に対して徴収した直接課税であ

23) Ogg, D., *Louis XIV, op. cit.*, p. 102.

24) cf. Beik, W., *Absolutism and Society in Seventeenth-Century France, op. cit.*, pp. 247-248.

25) • Ogg, D., *Louis XIV, op. cit.*, pp. 102-103.

• Beik, W., *Absolutism and Society in Seventeenth-Century France, op. cit.*, p. 141.

26) Beik, W., *Absolutism and Society in Seventeenth-Century France, op. cit.*, p. 141.

27) *Ibid.*, p. 141.

った²⁸⁾。またこのタイユ・ロアイヤルの税徴収システムとは、国王が決定した課税の一定額を、小教区ごとに要求し、そしてその小教区ごとは、さらにその下の各国民たる各納税者に要求する、という具合であった。

だが、フランス国王の国民たる貴族、僧侶およびブルジョア階級は、課税を納める代わりに、何か別な方法で国王に奉仕するという名目で、このタイユ・ロアイヤルから免除された。

結果的には、タイユ・ロアイヤルは、すべて農民がこうむることとなった。このようなことから考えると、アンシャン・レジーム時期の農民は、生活していく上で、課税がかなりの負担となり、悲惨な生活を送らざるを得なくなっていた、ということがわかる。

農民のこのような悲惨な状態をさらに悪化させたのは、ルイ14世が施行した2つの課税であった。すなわち、1695年のカピタシオン (Capitation)²⁹⁾と、1710年のディジェーム (Dixième)³⁰⁾とである。なお、1695年のカピタシオン当時、ケネーは1歳、1710年のディジェーム当時は、ケネー16歳であった。

この1695年のカピタシオン (Capitation) は、貴族階級にも支払いの義務を課していた³¹⁾。

またこの1695年のカピタシオン (Capitation) は、アウグスブルク同盟戦争時に、戦費の必要から、ルイ14世がフランスの国民を569の社会的ランクに位置づけ、そしてその569のランクに位置づけられた人の推定収入に対する課税であった³²⁾。

なお、推定収入に対する課税である1695年のカピタシオン (Capitation) は、1697年のライスウィク条約後、平和が回復すると廃止された。

1710年のディジェーム (Dixième) は、スペイン継承戦争時に、戦局の悪

28) Ladurie, E. L. R., *The Ancien Régime, A History of France 1610-1774*, First published as *L'Ancien Régime 1610-1770*, by Hachette, 1991, Blackwell Publishers Ltd., 1996, p. 163.

29) *Ibid.*, p. 206.

30) *Ibid.*, p. 260.

31) Jones, P. M., *The Peasantry in the French Revolution*, *op. cit.*, p. 42.

32) Ladurie, E. L. R., *The Ancien Régime*, *op. cit.*, p. 206 and p. 212.

化³³⁾、そして王室財政の窮乏から、ルイ14世がすべての身分に対して課した申告収入に対する10分の1課税であった³⁴⁾。

なお、すべての身分の申告収入に対する10分の1課税である1710年ディジェーム (Dixième) は、平和が回復した時、廃止された。

だが、1733年のポーランド王位継承戦争 (The War of the Polish Succession)³⁵⁾、および1740年のオーストリア王位継承戦争 (The War of Austrian Succession, 1740-1748, 1748年エーラ-シャペルの和約 (The Peace of Aix-la-Chapelle)³⁶⁾の時に、再び1710年のディジェーム (Dixième) が復活した。

1748年のエーラ-シャペルの和約後³⁷⁾、ルイ14世は、翌年の1749年にヴァンティエーム (Vingtième) の課税を決定した³⁸⁾。このヴァンティエームは、すべての身分に対して、確定収入の20分の1課税を徴収するものであった。

ディーム (Dîme)、タイユ・ロイヤル (Taille royale)、1695年のカピタシオン (Capitation)、1710年のディジェーム (Dixième)、そしてその変形である1749年のヴァンティエーム (Vingtième) は、すべて国王が自ら徴収した直接税であった。

これらの直接税の上に、さらに農民を苦しめたのは、以下の間接税であった³⁹⁾。すなわちギャベル (Gabelle, 塩税)、トレート (Traites, 取引関税)、エード (Aides, 酒の生産販売税) である。

ギャベル (Gabelle) は、塩に課せられた間接税であり、また税制の不公平さから、より農民に負担を強いらせた課税であった⁴⁰⁾。トレート

33) cf. Leadman, I. S., *The Political History of England*, Vol. 9, *op. cit.*, p. 205.

34) Ladurie, E. L. R., *The Ancien Régime*, *op. cit.*, p. 260.

35) Moreton Macdonald, J. R., *A History of France*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 316.

36) *Ibid.*, pp. 325-326.

37) Williams, B., *The Wing Supremacy 1714-1760*, in Sir George Clark, ed., *The Oxford History of England*, Vol. 11, Second Edition, Repr. of 1962, ed., Oxford University Press, 1987, p. 264.

38) Ladurie, E. L. R., *The Ancien Régime*, *op. cit.*, p. 383.

39) *Ibid.*, p. 67 and p. 149.

40) • Moreton Macdonald, J. R., *A History of France*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 117.

• Beik, W., *Absolutism and Society in Seventeen-Century France*, *op. cit.*, p. 250.

(Traites) は、国内関税のすべてを総称した関税、すなわち取引関税である。いいかえると、このトレートは、商品のある場所から他の場所へ、運ぶために課せられたペアジュ (Pèage, 通行税) を継承した関税でもあった。また、商品をマーケットで売買するトンリュ (Tonlieux, 市場税) を継承した課税でもあった⁴¹⁾。エード (Aides) は、酒の生産販売税であり、主としてワインに課せられた課税であった⁴²⁾。

アンシャン・レジーム時代に生きたケネーの父、すなわち小作農であったニコラは、1648年ごろの凶作、1662年の飢饉にもかかわらず、直接税であるタイユ・ロアイヤル、僧侶階級へのディーム (10分の1税)、領主への賦課金 (貢租, 地代, 現物税, 使用税) を、法的に支払わなければならなくなっていた。

また、これらの直接課税とともに、1694年生まれのケネー、ケネーは農民ではなかったので農民ほど課税に苦しめられなかったが、ケネーと同時代の農民は、ルイ14世がさらに付加した2つの直接課税を、支払わざるを得なかった。すなわち1695年のカピタシオン (推定収入に対する課税)、1710年のディジューム (申告収入に対する10分の1税) とである。また、この1710年のディジュームは、1749年ヴァンティエーム (確定収入の20分の1税) と形を変え、農民に課せられた。

直接税であるタイユ・ロアイヤルのほかに、ケネーと同時代の農民は、間接税であるギャベル (塩税)、トレート (取引関税)、エード (酒の生産販売税) をも課せられた。

農民に対するこのような課税をまのあたりにしていたケネーは、フランス王室の危機的財政、そしてその再建策のため、ケネーは、しだいに医師の道から、エコノミストへの道へと歩むようになっていった。

41) Moreton Macdonald, J. R., *A History of France*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 225.

42) • Jones, P. M., *The Peasantry in the French Revolution*, *op. cit.*, p. 182.

• Ogg, D., *Louis XIV*, *op. cit.*, p. 104.

Ⅲ. 経済循環

ケネーの経済循環の思想は、どこから生まれてきたのであろうか。それを解く手掛かりを知るためには、当然、ケネーの業績を知らなければならない。

ケネーは、父ニコラと母ルイズ・ジルー (Louis Giroux) との間に、13人兄弟のうち第8番目の子として生まれた⁴³⁾。またケネーは、11歳まで読み書きができず、12歳になってはじめて、親しい造園業者に国語を教えてもらった。国語が上達するとともにケネーは、司祭をはじめとして、村の有力者から外国語を教えてもらい、ラテン語やギリシア語も読めるようになった。

1707年父ニコラの死と同時にケネーは、外科医になることを志し、1710年10月、メレより多少都会であるクレスピェール (Cresprières) 付近の1外科医のところへ弟子入りした。だが、このクレスピェール付近の生活が、最初の志とは多少ちがっていたので、ケネーは、翌年1711年、17歳の時にパリに赴いた⁴⁴⁾。

パリに出て来たケネーは、生活のために彫刻師の徒弟修業をしながら、外科医になるための基礎知識を学んだ。この時期にケネーは、サン・コーム (Saint-Côme) 外科医学校やパリ大学医学部の講義に出席し、回診や包帯巻きを実際に学ぶとともに、解剖学、自然科学、哲学を勉強した⁴⁵⁾。

また、ケネーは、イングランド人の医師ハーヴェイ (Sir William Harvey) の『血液循環 (The Circulation of the Blood, 1628)』⁴⁶⁾をも勉強した。この『血液循環』は、ケネーの著『経済表』に、多大な影響を与えた。

この時期にケネーは、マールブランシェ (Malebranche) 氏の論文『真理

43) Niehans, J., *A History of Economic Theory*, op. cit., p. 37.

44) *Ibid.*, p. 37.

45) *Ibid.*, p. 37.

46) Hall, A. R., *Scientific Method and the Progress of Techniques*, in Later E. E. Rich, ed., *The Cambridge Economic History of Europe*, Vol. 4, *The Economy of Expanding Europe in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*, Repr. of 1967, ed., Cambridge University Press, 1980, p. 136.

の探求 (Recherche de la Vérité, 1675)』、『倫理学概論 (Traité de Morale, 1684)』に感銘を受け、形而上学への興味をより強くした。

1717年、23歳の時に徒弟修業を終えるとケネーは、パリで香辛料を取り扱っている食料品店の娘 (Jeane-Catpherine Dauphan) と結婚し、また同年1717年に、サン・コム (Saint-Côme) 医科大学で外科医の資格を取得し、そして1719年、パリより下流のセヌ川近くのマント (Mantes) 市で開業した⁴⁷⁾。

このマント市で開業医として活躍する一方、ケネーは、医学、特に内科医としての勉強を惜しまなかった。

当時の外科医は、内科医よりも社会的地位が低くみられていた。というのは、外科医は、理髪師と同様、ただ単に専門的技術者にすぎないと考えられていたからである。いいかえると、医師というのは、内科医であって、外科医というのは、内科医のアシスタント技術者にすぎないと考えられていたのである。

マント市でケネーの外科医としての名声が高まる一方、1728年に妻が死去した。この妻の死去と同時に、ケネーは、パリ大学医学部教授で、しかも内科医であるシルヴァ (Silva) 博士から、学術上の論戦を仕掛けられた。

この学術上の論戦は、当時最も有名な内科医であったシルヴァ教授が、一介の外科開業医のケネーの評判を、ねたんでのことであった。この学術上の論戦とは、体の1部に苦痛をともなう悪いところがあれば、その悪いところの反対側の血管を切除することによって、苦痛を和らげる、というシルヴァ法則についてであった。

ケネーは、1728年妻の死にもかかわらず、このシルヴァ法則の真实性を実験的に研究した。その研究の結果、ケネーは、シルヴァ法則に誤りがあることを、発見した。

その研究結果をまとめた論文、いいかえるとシルヴァ法則に対する反駁の書を、ケネーは、当時外科医の重鎮であったラ・ペーロニー (La Peyronie)

47) Niehans, J., *A History of Economic Theory, op. cit.*, p. 37.

の賛成を得、1729年8月11日『刺絡の結果に関する観察 (Observation sur les effets de la saignée, 1730)』という表題で公表した。

シルヴァ法則の反駁の書であるこの『刺絡の結果に関する観察』という論文は、ケネーが血液循環を実験的に研究していた外科医であったからこそ書いた論文であった。またケネーのこの血液循環の実験的研究は、ハーヴェイの『血液循環』の理論を、確実に修得していたから行えたものであった⁴⁸⁾。また、このハーヴェイの『血液循環』の理論は、その後のケネー経済書、すなわち彼の主著である『経済表』の理論およびジグザグ (Zigzag) 線にも多大な影響を与えた。

パリ大学医学部教授、そして内科医であるシルヴァ博士に仕掛けられた論戦に勝った外科医のケネーは、外科医の社会的地位を向上させるために、1730年みずから外科学会 (Académie chirurgie) を創設した。この創設は、当然、外科医の理論的知識を高めるとともに、外科医に対する評価を上げることにあった。

1735年2月ケネーは、「医学における理論と経験に関する論証 (Discours sur la théorie et l'expérience en Médecine)」を発表した。この論文は、医師には、内科医的な緻密な理論と、外科医的な熟練を要した経験とを、兼ね備えなければならない、とする経験科学を論証したものであった。またこの論文は、外科医が歴史的に長い間、ないがしろにされて来たことに対する戒めの論文でもあった。

また同年1735年に、名声の高まったケネーは、パリでヴィロー公爵 (Duke of Villeroy) の侍医になった。だが当時、パリでは外科医は、開業することができなかった。というのは、外科医の地位がいまだに低かったからである⁴⁹⁾。

そしてケネーは、外科医の地位を内科医と同じくらい高めるために、1736

48) Davies, G., The Early Stuarts 1603-1660, in George Clark, ed., *The Oxford History of England*, Vol. 9, Repr. of 1959, ed., Second Edition, Oxford University Press, 1979, p. 365.

49) Niehans, J., *A History of Economic Theory*, op. cit., p. 37.

年42歳の時に、「動物生理に関する物理的論究 (Essay physique fur l'économie animale)」と、「刺絡による治療術 (L'Art de guerir par la saignée)」とを発表した。後者の論文は、内科医から、多少公表手続について異論があったものの、外科医が社会において、着実に地位を確保していった論文であった。

またケネーは、1740年6月2日から1748年まで、外科学会の秘書の職に就き、外科学会に貢献している間、1744年9月にポンタムソン (Pant à Mousson) 医科大学で、医学博士の学位を取った。

その後ケネーは、化膿と皮膚・肉との再生を研究するとともに、消散剤、溶解剤、鎮痛剤、消炎剤、洗浄剤という薬品の効能についても研究し、そこで1749年、「化膿概論 (Traité de la suppuration)」, および「懐疽概論 (Traité de la gangrène)」という学術的な論文を発表した。このような医学での貢献により、1751年ケネーは、フランス科学アカデミー会員になった。また1753年には、ロンドン王立学会会員にもなった⁵⁰⁾。さらにケネーは、同年の1753年に、「継続熱に関する概論 (Traité des fièvres continues)」という学術的論文も発表した。

ケネーに1大転機がやって来た。

すなわち、それは、ケネーがルイ15世の愛妾、知的でパワフルなポンパドゥール夫人 (Madame de Pompadour)⁵¹⁾の私的医師として任命され、1749年にヴェルサイユ宮殿に迎え入れられた、からである⁵²⁾。

医師としてヴェルサイユ宮殿のグラン・コンマン (Grand Commun) の中2階 (Entresol) に起居することが許されたケネーは、この中2階で、フランス内外の知識人と知り合い、フランスの将来について、自由な意見を戦わせた。この中2階の話し合いを、一般に「中2階の会談 (Réunion de l'entresol)」と呼ばれている。

50) *Ibid.*, p. 38.

51) Ladurie, E. L. R., *The Ancien Régime, op. cit.*, p. 325, Plate 19.

52) *Ibid.*, p. 326.

この「中2階の会談」の中でケネーは、当時の重商主義政策の批判、具体的にはコルベルティスムへの反発を強めていった⁵³⁾。いいかえるとケネーは、この「中2階の会談」で、しだいに経済事情に関心を持ち、王室財政の逼迫、そしてその立て直し、ということを考えるようになっていった。

ヴェルサイユ宮殿の中2階に起居することが許された翌年の1750年にケネーは、エコノミストのグルネー (Vincent de Gournay) に出会った。

このグルネーとの出会いによりケネーは、医学よりも、経済学にヨリ興味を持ち始めた⁵⁴⁾。いいかえるとケネーは、この1750年のグルネーとの出会いにより、重商主義批判を強め、フィジオクラシイ (Physiocratie, 重農主義) の立場を活発化させていった⁵⁵⁾。

さらにケネーは、1752年ラ・ペーロニーの死後、ルイ15世から高い信用を得、重要視されるようになっていった⁵⁶⁾。このことから、ケネーが58歳まで、フランス外科医の発展のため、いかに貢献していたかがうかがえる。

エコノミストのグルネーにかなり影響を受けたケネーは、体の病気は医師が治すが、社会の病気はエコノミストが治す、という考え方になり、血液の循環と同様、財貨の循環を考えるようになった。

いいかえるとケネーは、1752年にルイ15世の王子ドーフィ (Dauphin) の天然痘を救ったことにより⁵⁷⁾、ルイ15世から絶大な信頼を受け、ルイ15世の4人の顧問医師のうちの1人になり⁵⁸⁾、そして、王室財政の危機回避を、積極的に研究し始めた。

53) Sée, H., *Economic and Social Condition in France During the Eighteenth Century*, Translated by Edwin H. Zeydel, Repr. of 1927, New York: Cooper Square Publishers, Inc., 1968, p. 143.

54) Oser, J. and Blanchfield, W. C., eds., *The Evolution of Economic Thought*, op. cit., p. 34.

55) Sée, H., *Economic and Social Condition in France During the Eighteenth Century*, op. cit., p. 161.

56) Niehans, J., *A History of Economic Theory*, op. cit., p. 38.

57) Higgs, H., *The Physiocrats*, op. cit., p. 26.

58) Niehans, J., *A History of Economic Theory*, op. cit., p. 38.

この「中2階の会談」で、ケネーは、哲学者エルヴェシウス (Helvétius)、コンディヤック (Condillac)、ビュッフオン (Buffon)、また1751年から『百科辞典 (Encyclopédie)』の執筆および発刊活動を行っている哲学者ディドロ (Denis Diderot) およびダラムベール (Jean Lerond d'Alembert)、さらにフィジオクラシイの創設に活躍したミラボー (Marquis de Mirabeau)、メルシエ・ド・ラ・リヴィエール (Mercier de la Rivière)、デュボン・ド・ヌムール (Dupont de Nemour) と、親しく会話を楽しんだ⁵⁹⁾。

この「中2階の会談」でケネーが考えたことは、現在の王室財政の逼迫は、フランスの重商主義政策、すなわちコルベルティスムの失敗にある、ということである。またその対処の仕方としてケネーは、第1次産業である農業しかないと考えた。つまりケネーは、なにも制限されない農業を拡大、増進させることによって、フランス王室の財政を立て直そうと考えたのである。いしかえるとケネーは、フィジオクラシイの考え方になっていったのである。

ケネーがフィジオクラシイの考え方になっていった背景には、当然、フランスの農業がコルベルティスムによって極度に衰退し、国民経済が縮小再生産の一途をたどっている、と考えていたからにほかならないのである。

コルベルティスムによる農業の衰退ということも、もう少し考えてみる。

コルベルティスムは、フランスの重商主義政策であり、利益率の高い商品や生産物は、保護するという考え方である。反対に、利益率の低い国内の農業生産物は、当然、制限が加えられる。この制限は、国内生産物の減少およびその価格の下落を招く。

つまりコルベルティスムによって、農業生産物への資本投下がなされなかった結果、フランスの農業が衰退していくということである。また、フランスの農業が衰退するということは、フランス国民の大部分を占めている農民が、結果的に苦しい状況下に置かれる、という悪循環を意味しているのである。

ケネーは、重商主義政策とは双璧をなす穀物の自由貿易をうたった論文を、

59) Lekachman, R., *A History of Economic Ideas*, New York: Harper and Brothers, Publishers, 1959, p. 81.

『穀物論 (Grains)』(1757年)で、著した⁶⁰⁾。この『穀物論』の中で、フィジオクラシイの最初の声明を見ることができる⁶¹⁾。

また、この「中2階の会談」で、グラスゴウ大学を退職したばかりのアダム・スミス (Adam Smith, 1723-1790) も⁶²⁾、大陸旅行中にケネーと親しく話をしている⁶³⁾。

フィジオクラート (Physiocrate, 重農主義者) のリーダーは、ケネーであった⁶⁴⁾。

ケネーは、1751年科学アカデミーの会員、1752年王子ドーフィの恩人、さらに多岐にわたる医学会への貢献により、1755年ルイ15世から下賜金を受け賜った。この下賜金をもとに、ケネーは、息子に広大な農地を購入し、息子に農業経営を行わせた。この時点でケネーが、かなり農業に興味を持っていた、ということがわかる。

ケネーは、「中2階の会談」で知り合った『百科辞典』の編集長ディドローから、当時の経済問題に関する原稿依頼を受けた。

ケネーは、早速『百科辞典』へ、「明証論 (Evidence)』(1756年)という論文を寄稿した。

この「明証論」は、外科医をめざしていた時に、多大な影響を受けたマールブランシェの形而上学的要素を多分に含んでいた論文であった。『百科辞典』の編集長ディドローが望んでいたのは、経済問題に関する論文であったので、再びケネーは同年、「小作人論 (Fermiers)』(1756年)と、翌年「穀物論」(1757年)とを寄稿した⁶⁵⁾。

60) Pressman, S., *Quesnay's Tableau Économique, A Critique and Reassessment*, Augustus M. Kelly Publishers, 1994, p. 8.

61) *Ibid.*, p. 9.

62) Ogg, F. A., and Sharp, W. R., *Economic Development of Modern Europe*, Repr. of 1917, ed., New York: Macmillan Company, 1969, p. 78.

63) Gray, A., *The Development of Economic Doctrine*, Repr. of 1931, ed., Longmans, Green and Co., 1935, p. 98.

64) Haney, L. H., *History of Economic Thought*, *op. cit.*, p. 163.

65) Niehans, J., *A History of Economic Theory*, *op. cit.*, p. 38.

この「小作人論」は、ケネーが執筆した経済論文の中で最初のものであった。なお、ケネー62歳のことであった⁶⁶⁾。「穀物論」は、ケネーが経済書として出版した3つの論文のうちの1本である。また、この「穀物論」は、フランス重商主義に反対し、自由貿易に賛成した論文でもあった⁶⁷⁾。

「小作人論」と「穀物論」とは⁶⁸⁾、当時のフランスの王室財政の逼迫が、農業の衰退にあると分析し、かつその再建にあたるとともに、フランス農業の重要性を再確認させた論文であった。いいかえるとケネーは、この2つの論文で、フランスの国民経済の縮小再生産の原因が、農業の衰退にある、と結論づけ、その対策には、馬耕による三圃式農法を取り入れた農業の大農経営化を、貫徹することにある、としたのである。

なお、この「穀物論」の中には、14項目の「経済的統治の格律 (Maxims of Economic Government)」⁶⁹⁾が含まれていた。この「経済的統治の格律」は、ケネーが行おうとしていた経済学における科学的研究を、定式化しようとしたものであった⁷⁰⁾。

この「小作人論」と「穀物論」との中の経済分析は、その後のケネーの『経済表』に、多分に影響を与えた。おそらく『経済表』のスケッチは、1757年に描かれたであろう⁷¹⁾。いいかえると、「小作人論」が発表されたのは1756年、またその1年後の1757年に「穀物論」が発表された。この2つの論文の間の1年間は、当時のフランス財政の著しい危機的状態を念頭に置き、ケネーが『経済表』を構築するのに、最も努力を払った1年であった、といえる。

66) *Ibid.*, p. 39.

67) Pressman, S., *Quesnay's Tableau Économique*, *op. cit.*, p. 8.

68) この2つの論文は、1775年に公刊されたリチャード・カンティロン(Richard Cantillon, 1680-1734)の「商業一般性質論 (Essai sur la Nature du Commerce en géntaéral)」の中に、見ることができる。Niehans, J., *A History of Economic Theory.*, *op. cit.*, p. 38.

69) Meek, R. L., *The Economics of Physiocracy*, Essays and Translation, Repr. of 1962, ed., Augustus M. Kelley, Publishers, 1993, p. 72.

70) *cf. Ibid.*, pp. 72-87.

71) Niehans, J., *A History of Economic Theory.*, *op. cit.*, p. 39.

ケネーの『経済表』は、当然、コルベルティスムに反対するために、考え出されたものであり、また、その反対の考えというのは、再生産構造の見通しであった。

この再生産構造の見通しが、経済循環の考え方となっていった。

すなわち、ケネーは、この再生産構造を図式化および数量化することにより、経済循環としての理論を打ち立てたのである。いいかえるとケネーは、Circular-flow の理論を、Circular-flow of Economy の理論へとかえていったのである。

ケネーの経済循環理論の根幹に、すなわち『経済表』の執筆に多大な影響を与えた論文は、ド・マリヴェール (De Marivelt) との共著であり、ミラボー (Marquis de Mirabeau) 侯の著『人間の友 (L'Ami des Hommes)』(1759年) に掲載されている1758年の「人口、農業および商業に関する重要問題 (Questions intéressantes sur la population, l'agriculture et la commerce)」である⁷²⁾。この論文は、ヴェルサイユ宮殿の「中2階」、すなわちケネーの部屋で、ディスカッションされた後⁷³⁾、執筆されたものであり、またこの論文は、過去100年間のフランス経済事情を、数学、とくに幾何学的に分析し、把握したものである。この時点でケネーは、農業のみが付加的な富を作り出す、と確信した⁷⁴⁾。

この1758年の「人口、農業および商業に関する重要問題」が執筆された時点でのケネーの主な学問的蓄積のプロセスを、再度確認すると以下のようになる。

- 1706 (12歳) 造園業者から国語を学ぶ。

72) Pressman, S., *Quesnay's Tableau Économique*, *op. cit.*, p. 25.

※L'Amie des Hommes の初版年は、1759年である。だが、この「人口、農業および商業に関する重要問題」という論文は、L'Amie des Hommes, 1759, に掲載されている論文なので、「人口、農業および商業に関する重要問題」の論文の執筆年を、L'Amie des Hommes の初版年1759年よりも前の1758年にした。

73) Meek, R. L., *The Economic of Physiocracy*, *op. cit.*, p. 16.

74) Ekelund, R. B. and Hébert, R. F., *A History of Economic Theory and Method*, Forth Edition, Repr. of 1975, ed., McGraw-Hill Companies, Inc., 1997, p. 79.

- 1710 (16歳) 1 外科医に弟子入り。
- 1711 (17歳) サン・コム外科医学校とパリ大学医学部に入学。
- 1749 (55歳) ポンパドゥール夫人の侍医。
- 1750 (56歳) エコノミストのグルネーに出会う。

環境が人をつくり、また人が環境をつくるように、ケネーの環境は、常に問題意識を持たせる環境にあった。また、問題意識を持たせた環境の中に、ケネーのたゆまない努力の結果、ケネーは、Circular-flow の理論から、Circular-flow of Economy の理論、すなわち『経済表』を出現させたのである。

体の病気は、医学で治すように、社会の病気は、経済学が治す。いいかえると、体の病気は、医者が治すように、社会の病気は、エコノミストが治さなければならない。

このような考え方が、60歳を過ぎたケネーの脳裏から離れなかった。そこでケネーは、フランス社会の病気を、産業と貿易に規制を課しているコルベルティスムと考え、それに反対するとともに⁷⁵⁾、また、フランス経済にとって1番問題になっている農業の衰退を、打開しようとした。

すなわち結果的にケネーは、資本の単純再生産を、血液の循環に置きかえた。そして、ケネーは、この体の血液の循環をジグザグ (Zigzag) 線でもって、経済循環に置きかえようとした⁷⁶⁾。この資本の単純再生産こそが、1758年に『経済表』として、出現したのである。

ケネーがこの1758年の『経済表』を執筆した背景には、当然、ルイ15世に、コルベルティスムによる弊害と、正常な経済のメカニズムとを知らしめることにあった。いいかえるとケネーは、ルイ15世に、ある1年間の収入と支出との Circular-flow (循環) を、相互作用のプロセスとして、考えさせることにあった⁷⁷⁾。

75) Ogg, F. A., and Sharp, W. R., *Economic Development of Modern Europe*, op. cit., p. 78.

76) cf. Ekelund, R. B. and Hébert, R. F., *A History of Economic Theory and Method*, op. cit., p. 79.

77) *Ibid.*, p. 79.

では、経済循環をあらわしたこの1758年の『経済表』とは、いかなるものであろうか。

ケネーは、まず始めにフィジオクラシイ的な考え、すなわち農業を重要視するとともに⁷⁸⁾、フランスの国民を3つの社会的階級に分けた。その3つの社会的階級とは、「生産階級」、「地主階級」、「非生産階級」である。

1758年の『経済表』は、この3階級の生産および生産の再生産過程を、これを媒介する流通過程とともに、ジグザグ線で示されている。

なお、1758年の『経済表』は、表2『経済表』初版になり、また第2版は、表3『経済表』第2版になり、さらに第3版は、表4『経済表』第3版になる。

表4『経済表』第3版からわかることは、地主階級の所得の再生産が中心に考察され、しかも、生産の再生産過程における流通が、直接に各階級に属する個人の再生産過程として示されている、ことである。また、この『経済表』は、階級間の取り引きが、各階級に属する個人間の取り引きとして示され、さらに、その取り引きが多くジグザグ線で示されている、ことである。

すなわちケネーは、フランスの経済循環を、このようなジグザグ線、すなわち『経済表』でもって、把握することに成功したのである。

なお、ケネーのこのジグザグ線は、後のケインズ（Sir John Maynard Keynes, 1883-1946）に多大な影響を与えた⁷⁹⁾。また、ケネーのこのジグザグ線は、レオンティエフの産業連関モデルの表の中にも置き換えられている⁸⁰⁾。

78) *Ibid.*, p. 79.

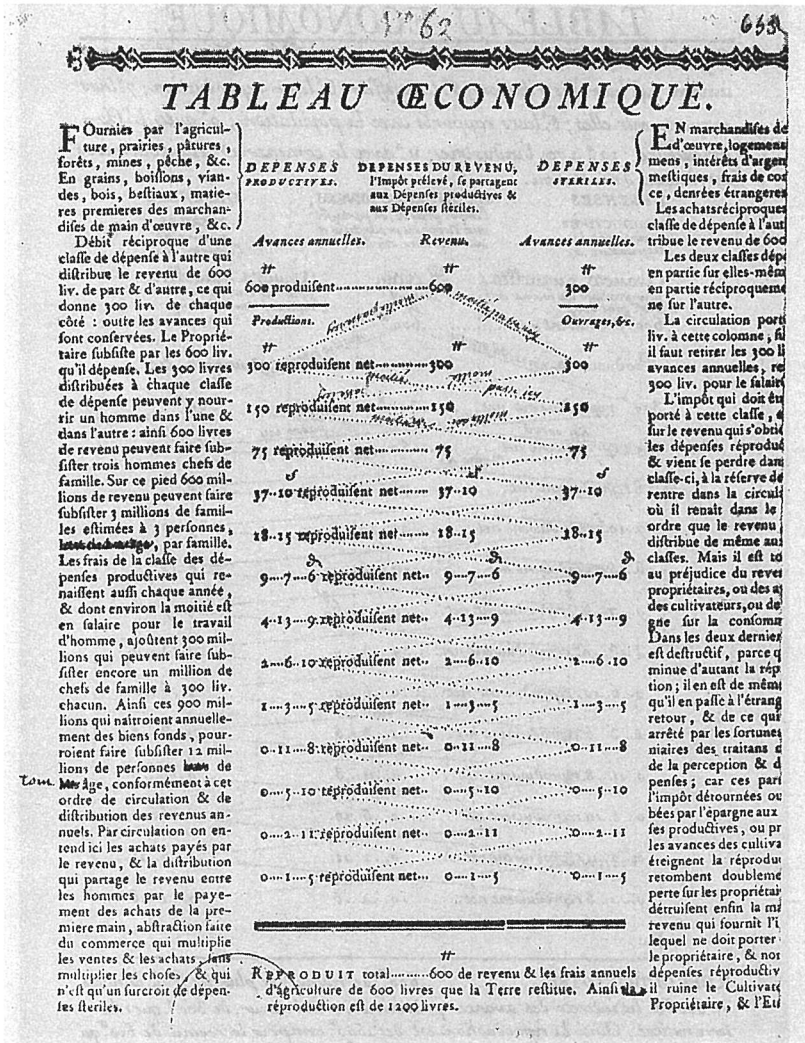
79) Pressman, S., *Quesnay's Tableau Économique, op. cit.*, p. 4.

80) *Ibid.*, p. 5.

表2 『経済表』初版

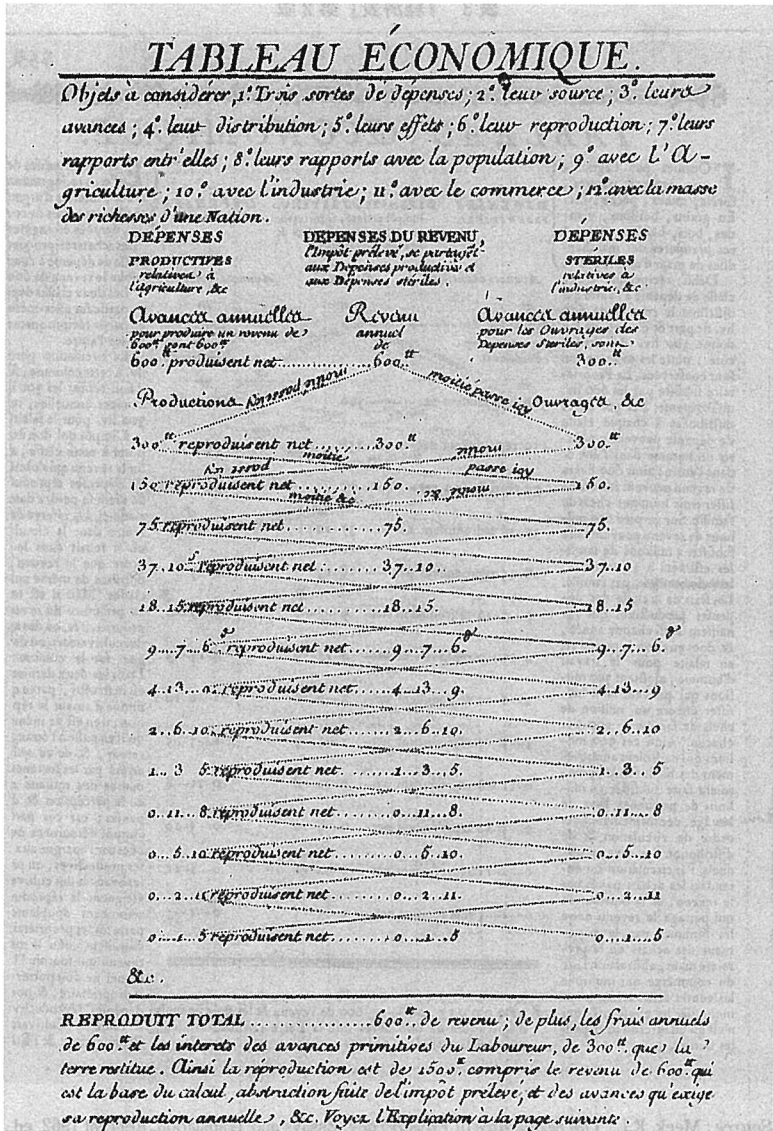


表3 『経済表』第2版



Source : Meek, R.L., *The Economics of Physiocracy*, Essays and Translation, Repr. of 1962, ed., Augustus M. Kelley, Publishers, 1993, pp. 112-113 の挿入表。

表4 『経済表』第3版



Source : Meek, R.L., *The Economics of Physiocracy*, Essays and Translation, Repr. of 1962, ed., Augustus M. Kelley, Publishers, 1993, pp. 112-113 の挿入表。

IV. おわりに

ケネーの経済循環への発想および理論は、ある日突然、出現したのではない。

環境が人をつくり、人が環境をつくるように、ケネーは、かなり恵まれた環境に育った。だが、この恵まれた環境だけでは、とうてい経済循環の発想および理論は、出現しなかった。この経済循環の発想および理論は、ケネー独自の絶え間ない努力の結果、出現したのである。

ケネーが遭遇した人生の転機は、外科医になるためパリに上京し、哲学者マールブランシェ形而上学、ハーヴェイの『血液循環』を勉強したこと、パリ大学医学部教授シルヴァ博士との学術的論戦に勝ったこと、ヴェルサイユ宮殿の「中2階の会談」で、当時最高の頭脳を持った人たち、特にエコノミストのグルネーに会ったことである。

このような状況下および体験において、ケネーは、農業の衰退を打破するために、再生産過程における経済の正常なメカニズム、すなわちジグザグ線でもって表わす『経済表』を考え出したのである。